

てきた。詳しくは拙稿「マルティニアヌスの論理学に対するエリウゲナの立場についての一考察」(平成2年『山梨大学教育学部研究報告』第41号第1分冊, pp. 68-71)を参照。

- 3) 拙稿「最近のエリウゲナ研究の概要」(昭和56年『山梨大学教育学部研究報告』第32号, 第1分冊, p. 88)参照。

---

Erwin Waldschütz: *Denken und Erfahrung des Grundes*  
 —Zur philosophischen Deutung Meister Eckharts.

Herder Verlag, 1989, 369 S.

中山善樹

エックハルト研究史において、「エックハルト像の変遷」が語られるようになってからすでに久しいが、その後も研究の進展につれて、解釈の振幅も広がってきているようであり、今日、エックハルト解釈は極端な分裂をきたすようになってきたと言われる。そのような状況において、前号の研究動向においても、素描しておいたように、Kurt Flasch の主宰する国際的な研究グループのもたらした刺戟は、はかり知れないものがある。その成果の一端は Burkhard Mojsisch が試みた、エックハルトの「始原」(principium, grunt) 概念の発掘である。

爾来、エックハルト研究においては、ラテン文テキストの内部に限定しても、「存在」(esse)と「知性」(intellectus)ないし「知性認識」(intelligere)をめぐるさまざまな紛糾した事態を、新たな視角から照射するものとして、始原概念の、テキストに密着した究明が期待されてきた。その時宜に適った研究が本書であり、本書はポッフム大学の研究グループの膨大な成果を十分踏まえた上で執筆されており、本書によって、現在のエックハルト研究に裨益するところは大であると信じる。しかしその副題がすでに含意しているように、本書の論理を一貫して追求することは、きわめて困難であり、あまりにも紆余曲折しているために、読者は当惑さざるをえないであろう。そこで以下においては、評者の眼に止まった若干のライト・モティーフを浮かび上がらせることによって、本書の理解に資するものとした。ここでは、批評はいわば解釈の解釈という形態をとらざるをえない。

著者によれば、「始原」への問いは、存在者の全体をその根拠において問うものとして、哲学においては、悠久の歴史を持っている。この問いは哲学の問いのなかでも、最も困難なものである。それは存在者の全体をその統一性から把握しようとするものであるからである。著者によれば、その統一性をエックハルトは「始原」として把握している。本書はエックハルトの根本問題を始原への問いのうちに探究し、そこからエックハルトの全体像を組織的に構成しようとする大胆な試みである。著者によれば、エックハルトはその際、主としてアウグスティヌスに依拠しているが、アウグスティヌスよりも哲学的によりいっそう前進し、トマスよりもさらに前進した。

著者によれば、エックハルトの思想の特徴は、一つはその方法論にある。エックハルトによれば、聖書の言葉は殻に包まれてをり、その核心を取り出すことが、「注釈」(ex-positio)の任務である。つまり字義の意味に根ざしている隠された譬喩的意味を解釈して取り出すことが注釈の目的である。その際、聖書からそのような仕方に取り出された真理は、divina, naturalia, moralia に関する哲学的真理と「協調する」(consonare)というのがエックハルトの確信である。このような仕方ではエックハルトは、「神学」と「哲学」と「倫理学」を統一して、唯一の哲学的真理を明るみに出すことに専念しようとしたのである。またこのようにして信仰と知性の統一を計ろうとしたのである。アンセルムスがあくまで最初に、信仰を指定し、しかる後に、その知解を計るのに対して、エックハルトにおいては、信仰と知性は併存している。エックハルトはこのような仕方では、あくまで哲学の立場から、「哲学者たちの自然的論証」(rationes naturales philosophorum)によって真理を明らかにしようとしており、そのためにいかなる啓示も超自然的の事柄にも依拠してはいない。それらは彼の把握の確証として用いられるのみである。このようなエックハルトの方法論の捉え方は、Flasch の見解を大筋において踏襲しているが、彼らと異なるのは、ここにエックハルトの思想的な独自性を見るのではなく、この点においてエックハルトは当時の伝統に則している点である。

エックハルトの始原論は、ラテン文テキストの内部においては、主としてその『ヨハネ福音書注解』(Expositio sancti Evangelii secundum Iohannem)と『創世記注解』(Expositio Libri Genesis)において展開されている。そして予め注目すべきことは、エックハルトは『ヨハネ福音書』冒頭における“In principio”と『創世記』冒頭におけるそれとの間に、その形而上学的意味において、何らの相違も見えてはいないとい

うことである。彼はあくまでそれらを整合的に解釈しようとしている。エックハルトがこれらの書物で「始原」について語る時、第一次的に意味されているのは、神である。“in divinis”においては、神は第一次的に始原であるが、“in creaturis”においては、神は第一次的には、「始原」ではなく、「第一原因」(prima causa)として把握される。始原は、第一次的には、父からの子と聖霊の発出に用いられ、第一原因は、被造物の創造に対して用いられる。

Mojsischによれば、エックハルトはその「本質的始原」(principium essentiale)論を、Dietrich von Freibergの「本質的原因」(causa essentialis)論から継承している。そのことを暗黙のうちに念頭においた上で、著者は、上に述べたことから、すでにその一端が明らかのように、エックハルトにおいては、「始原」と「原因」はその形而上学的意味において異なることを明らかにしようとする。著者によれば、エックハルトにおいて“causa essentialis”とは、すべての被造物をその存在者としての存在へと到達せしめるものである。しかもそれは自然的存在者の範囲に限定される。したがってこの場合の“essentialis”とは、「存在賦与的」という意味において把握されなくてはならない。神は causa prima としては、「原因から生じたもの」(causatum)からも、その創造の行為からも区別されなくてはならない。したがって神を被造物との関連において用いられる causa の概念を用いて説明するだけでは、充分ではない。

著者によれば、始原と「始原から生じたもの」(principiatum) (エックハルトはこの対になった用語を非常に好む)との関係は、「原因—結果」(causa-effectus)図式によっては、到底説明することができない。まずもってエックハルトが言っていることは、すでに言われたように神が、なかでも「父」(pater)なる神が、語るものとして、すなわち「子」(filius)を生み出すものとして、第一次的に始原と名付けられていることである。ここから明らかなのは、始原と始原から生じたものとの間には、原因と結果との関係には見られない「ペルソナ的」関係が見られるということである。この点は著者が強調して止まぬ論点である。次に始原は、特に『創世記注解』において明確であるが、「理念」(ratio)である。理念とは、また換言すれば、「ロゴスないし言葉」(logos sive verbum)である。それは時間的意味において、あるいは論理的意味において存在者に先立つものではなく、むしろそれらを超えて、存在者とその存在において可能にしているものである。

さらに極めて重要なことは、始原は同時に純粋な知性であり、そのうちには、いかなるものとも共通のものを持たない思惟以外のいかなる存在もないということである。この点に非イデア的な存在に対するすべてのプラトンの新プラトンの留保が認められると同時に、解釈者によっては、エックハルトがイデアリズムの先駆者であることの根拠にもなっている。しかし著者によれば、エックハルトはけっして専一的に新プラトン主義の伝統に属する思想家ではない。むしろエックハルトは、著者の見解では、14世紀初頭の先鋭化されたアリストテリズムに対する反動として流入してきた新プラトン主義の哲学（Dietrich も勿論これに属する）に対して批判的に対決しており、その代わりにアリストテレスとトマス哲学に依拠しているのである。

そのことはエックハルトが存在者の存在を哲学の第一課題だとしている点にも現れており、この点においてエックハルトはどこまでも伝統的な形而上学と対決しているのである。その始原論においても、著者によれば、エックハルトは究極的には、存在論的観点から論究している。すなわちエックハルトは始原は存在せしめるのであり、この始原の存在を問題にしている。始原と「終局」(finis) は同一の存在であり、神の創造の行為は存在のうちで、存在に向けて行われるのであり、それは万物が存在するためなのである。そして著者によれば、単に新プラトン主義的なコンテクストでは、このような存在論は出てこないのである。

著者は大体以上に素描したような仕方では、Mojsisch の理論に対して批判的対決を試みているが、しかしそれを十分に確証するためには、単にエックハルトの始原概念と原因概念に議論を限定しているだけでは、不十分であると思われる。そのためには、Mojsisch が立論の素材としている Dietrich の“causa essentialis”論を、再度新たな観点から検討してみなければならぬであろう。